

当科における扁桃周囲膿瘍症例の検討

稲垣 信吾 木下 裕子 山本 純平 鈴鹿 有子
山田 奏子 下出 祐造 志賀 英明 三輪 高喜

金沢医科大学

【目 的】 扁桃周囲膿瘍は、口蓋扁桃の炎症が扁桃被膜と咽頭収縮筋との間に広がり進行、膿瘍を形成した状態である。重篤化するとさらに周囲へ炎症が波及するため、早急かつ的確な対応が求められる、耳鼻咽喉科の救急疾患である。今回、過去3年間に当科において入院加療を行った扁桃周囲膿瘍症例について検討を行ったので報告する。

【症例と結果】 2009年6月から2012年5月までの3年間に、当科で入院加療を行った扁桃周囲膿瘍症例は46例で、男性32例、女性14例で、平均年齢は男性48.6歳、女性40.3歳と男性に高い傾向を認めた。発症月別では、4月と12月に2峰性のピークを有していた。CTにより膿瘍の極在上極中心型と下極中心型に分けたところ、前者が28例、後者が13例と、上極中心型が多数を占めた。処置としては、抗生薬投与のみで治療を行った例が13例、抗生薬に加えて穿刺を行った例が7例、切開を行った例が24例、即時扁桃摘を行った例が2例であった。上極型と下極型とで切開、穿刺を行った割合に差はなかったが、即時扁桃摘を行った2例はいずれも下極型で、膿瘍が舌骨周囲まで波及し、気管切開も同時に施行した症例であった。在院日数は上極型6.5日、下極型7.4日と部位による差はなく、処置による在院日数は、抗生薬のみ6.0日、穿刺+抗生薬5.0日、切開+抗生薬6.8日、即時扁桃摘+抗生薬15.0日と即時扁桃摘例では入院期間の延長を認めたが、それ以外では差は認めなかった。

【考 察】 今回の検討では、即時扁桃摘例を除いては部位ならびに処置方法により入院期間の差は認めず、またいずれも良好な経過を辿った、これは、膿瘍の形状や前後の位置などに応じて処置方法が異なったためと思われる。画像での膿瘍の形状により分類を行う報告もなされており、処置方法を決定づける因子として何が適切かさらに検討を加え報告する。